

守 対談 破 創

東京都の中学校初の民間校長として、「よのなか科」はじめさまざまな手法で教育の本質に迫っている藤原校長。自身も大学で教育に携わった須田審議委員と「和田中モデル」の実際から金融教育、日本教育の課題まで熱く語り合った。すると成熟社会に不可欠な能力やコミュニティ再生への道筋などが見えてきた。

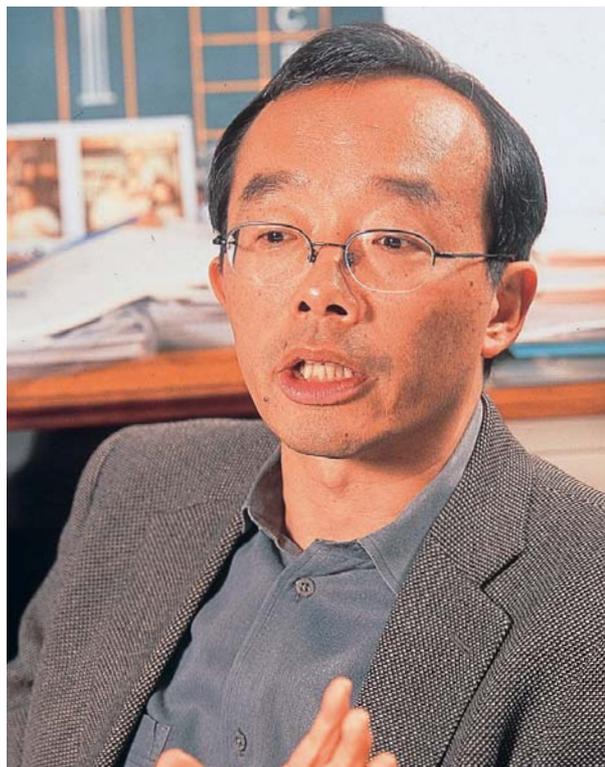


日本銀行政策委員会審議委員

須田美矢子

Miyako Suda

[すだ・みやこ] 1971年東京大学教養学部卒業、1979年東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得。1982年専修大学経済学部助教授、1988年専修大学経済学部教授、1990年学習院大学経済学部教授。2001年日本銀行政策委員会審議委員、2006年同政策委員会審議委員再任。



東京都杉並区立和田中学校校長

藤原和博

Kazuhiro Fujihara

[ふじはら・かずひろ] 1978年東京大学経済学部卒業後、リクルート入社。東京営業統括部長、新規事業担当部長を経て、1993年ロンドン大学ビジネス・スクール客員研究員。1996年リクルートフェロー、2003年杉並区立和田中学校校長。著書に『人生の教科書「よのなかのルール」』（宮台真司氏との共著）、『「ビミョーな未来」をどう生きるか』（以上筑摩書房）『校長先生になろう!』（日経BP社）など多数。

大人が必死に学ぶ姿からこそ
子供は学ぶものだ

「自立と貢献」で
教育界の「宗教改革」を

須田 藤原校長先生は「よのなか科」などユニークな教育で注目を集めておられます。藤原先生はお子さんと一緒にイギリスに行かれたことが教育について深く考えるきっかけとなったとお聞きしています。私もオックスフォードに当時中学二年生の子供を同行したときに、教育に関心を強めました。娘の通ったプライベートスクールでは、歴史は覚えるものではなくデイベートの授業でした。数学では、大ざっぱな課題に自分で仮定を置きながら時間をかけて答えを考えていくというのもありました。仮定次第で答えが違ってくることになりました。このような教育にまずショックを受けました。イギリスでの経験を踏まえて、今、日本の教育についてどんなことをお考えですか。

藤原 私は当時四歳、今年高校三年生になる息子を連れて、ロンドン郊外のウエンブリーに住みました。そのローカルスクールでは、いろいろな衝撃がありました。

初日には、担任のパワー先生が

ら「お父さんは早く帰ってくれ。子供があなたのほうばかり気にしてしまおう」と言われました。三ヵ月後の保護者面談では、「インディペンデンス（自立）とコントリビューション（貢献）」が評価基準だと話してくれました。四歳の子供の、ですよ。すごくインパクトがありました。

須田 和田中学校の壁にも、「自立貢献」という言葉が掛かっていますね。

藤原 日本では幼児に自立とはまじいと言いません。小学校の教育目標をみても、協調性ファーストです。しかし、四歳のウチの子のどこがインディペンデンスでしょうか。話を聞くと、一生懸命一人で遊ぼうとしている。そして、何とかほかの子供たちと遊ぼうとするところもある。これがインディペンデンスの芽で非常に重要だということです。

では、英語もしゃべれず迷惑をかけてばかりいる子のどこがコントリビューションでしょうか。先生は、言葉が分からないこと自体が、「どうやったらかんがえられるか」という周りの思いを引き出

しているというのです。

この二つの言葉を反芻（はんそう）してみているのは、これがイギリスの市民社会のベースとなっているということ。日本では、協調性と「情報処理力」ばかりを教えられますが、それだけでは、成熟社会は形成されないのだと突きつけられた思いでした。

「自立と貢献」をコンセプトにした教育というのは、現代の日本社会では「宗教革命」に近いものではないでしょうか。日本にある小学校三万数千校のほとんどの教育目標がこう変わらなければ、日本の成熟社会を担う市民は育たないでしょう。これを教育目標とした学校をどうつくるかという努力をしているのが、和田中学校なのです。

学校を核とした コミュニティの再生

須田 先ほど擦れ違った生徒さんたちは、皆さんあいさつをしてくださいましたが、どんな教育をされているのですか。

藤原 そうですか。実はあいさつをしなさいなどと強制するような

ことは全くしていません。ただ、外から入ってくる大人に慣れているというものはあるでしょう。私は「ナナメの関係」を重視しています。これは、自分の肉親以外のお兄さん、お姉さん、おじさん、おばさん、おじいさん、おばあさんという利害関係のない第三者と、どれだけ交われるかということ。異質な他者と交わる体験は、子供から大人になる通過儀礼として非常に重要なことです。

具体的には、「地域本部」の部屋が学内にあり、六〇〜七〇人のボランティアが活躍しています。半分が学生で残りが地域の大人です。日常の授業の手伝いや、「土曜寺子屋」、図書館の管理運営、校庭の緑の世話など、常時大人が学校に顔を出しているのです。

自然にあいさつをしたい生徒はするし、照れてできなくても構わないと思っています。

須田 金融教育には、コミュニティをいかに住みやすいものにするかという視点もあります。アメリカなどでは、ボランティアで教育に携わる人が数多くいます。和

ものを感じます。いろいろな人と接する機会が多いことは、ものごとを考えるときに重要なバランス感覚を磨くことにもつながります。

藤原 「集中力とバランス感覚」と私もよく言います。それらは、小中学生時代にしか養われなからずです。また、数字では表わしづらいですが、バランス感覚は一代にどういふ人とかかわりを持っていたか、どんな環境で育ったかで決まってきます。

今の子供たちは家庭でも生まれませんし、地域社会でも生まれません。そこに大きな不幸があります。そこで、学校の中に擬似的な地域社会を築いて、そこで子供たちがナナメの関係を育めるようにしているのです。そうしないと、人と人との距離感が分からない子供たちがどんどん出てきてしまします。いじめの問題がここまでややこしくなっているのは、ここにも問題があると思っています。

学校を核にしたコミュニティでのコミュニケーションの質を改善できれば、思いやりも生まれるし学力も上がる。さらには、志も芽生え愛国心も育まれるでしょう。

須田 私も娘は地域の公立小学校に入れました。まず子供だけでなく大人を含めて地域のいろいろな人たちと交わることが、重要だと考えたからです。

情報処理力と情報編集力のウェルバランスを考える

須田 最近格差社会という言葉をよく聞きます。金融政策はマクロ政策ですから、そういうことを考慮に入れても経済全体の中心値がどの辺りにあるのかを常に考えています。翻って、授業ではどうでしょう。私は教えるときにどのレベルの学生に目線を合わせて授業をやったらよいかいつも迷ってきました。

藤原 私は、「情報処理力」に加えて「情報編集力」を重視します。情報処理力とは、正解を導き出す力です。素早くジグソーパズルを完成させる力ですね。しかし、成熟社会では、この力だけでは乗り越えられません。ジグソーパズルの図柄というか、世界観そのものを構築する力が必要になってきます。それが情報編集力です。成熟社会では正解が一つであることは、

ほとんどありません。状況の中で自分が納得できる解、他人を納得させられる解——「納得解」を導き出さなければなりません。納得解の導き方こそが重要なのです。

この情報処理力と情報編集力のバランスは、小学校時代は九対一くらい。中学で七対八、二対三、高校で五対五で、大学では一〇〇%情報編集力でいってほしいですね。

以上を前提として、次に、生徒のどのレベルにターゲットを合わせるかという問題になります。

公立中学校の場合は偏差値で三〇〜五〇ぐらいの幅があります。その三割は、家庭が基礎学力をフォローできる状況にありません。最近、国際学力テストで日本の成績が下がったと騒がれています。実際には下位の生徒の成績が底割れしているだけ。公立中学では底割れさせないように、下位の生徒に照準を合わせないわけにはいきません。しかし、上位を引っ張り上げないと真ん中の成績も上がらない。

そこで和田中学校では、成績の幅が広い英語については地域本部

に英語A（アドベンチャー）コース（授業外で週三〜四コマ）を準備し、英語に強い生徒を引き上げています。授業と合わせると週八〜九コマで、私立中学以上の充実度。なお、英語Aコースに通っていた卒業生一三人のうち一〇人が英検準二級に合格しました。

数学には、小学校教育の問題があります。分数の四則演算や、分数から小数への移行を理解しないまま中学に入學してくる生徒がかなりいる。これを何とか救おうと和田中学校では、全国初で、小学校六年生を呼んで、一月から三月まで携帯型ゲーム機を使った事前学習をやらせています。事前と事後に同じテストを行った結果では、一割スコアが上がっています。四月からは、分数の足し算ができない生徒は、補習扱いで土曜寺子屋で勉強させます。

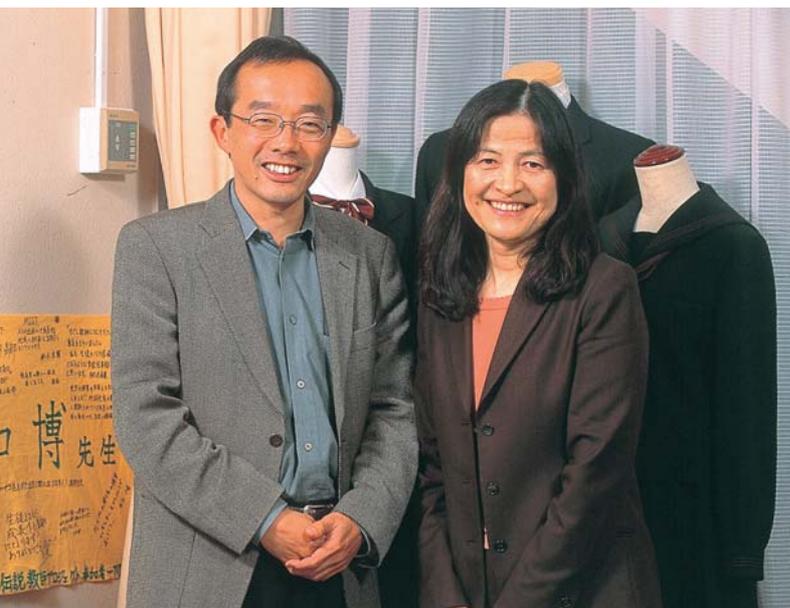
「もうかる」という言葉も遠慮なく使おう

須田 日本銀行に着任してから、小学生から大学生まで全国出張講義をしています。それでは限界があるので、最近では自分で直

接教えるより教師に話をし、彼らが子供たちに教えたほうが効率的なような気もしています。

藤原 現在、教員の平均年齢は四〇代半ば。四〇代以上の教員は変えようと思ってもなかなか変わらない。それは教員に限らずビジネスの世界でも同じでしょう。四〇を超えた人が研修によって人生観が大きく変わったり、能力が飛躍的に伸びたりするのはまれです。そんなエネルギーがあるんだから、直接中学生に教えるほうが一〇〇倍価値がある。変わるのにはまだ頭が柔らかい二〇代か三〇代の人たちでしょう。だからその人たちに「よのなか科」の私の授業を体験してもらっています。昨年は全国七カ所で「マスター研修」を実施しました。この五年間で約五〇〇〇人が実際に私の授業を見て、衝撃を受けて帰られました。

「よのなか科」には、三つの秘密があります。まず、授業にコミュニケーションとロールプレイというゲームの要素が入っていること。「円ドルレートを自分で決めろ」という仕掛けをすれば、自分のこととして金融や経済に興味を持つで



しょ。そして、正解が一つではない課題に常に取り組むこと。つまり、納得解を導く情報編集力を養うものになっていきます。第三が、大人と子供と一緒に学ぶこと。「よのなか科」の授業に参観という態度はありません。子供は大人が教える姿から学ぶのではなく、大人が学ぶ姿から一番学ぶのです。

須田 私も子供に話をするとき、親の積極的な参加を歓迎しています。金融教育は長い人生をよりよいものにする手助けとなるので非常に重要ですが、日本人にはお金の議論を避ける独特の雰囲気がある

ります。お金の話をする、お金至上主義のように受け止められてしまったりします。

藤原 「お金は大事だよ」ということを、変に言い換える必要はないと思います。私の授業では、冒頭に「この地図のどこに出店すると一番『もうかる』店になると思いますか？」と「もうかる」という言葉をいきなり使います。いわゆる価値論の導入ですが、「そんなこと言っちゃっていいの？」といったところから入ると生徒は盛り上がるのです。

「世界一のお金持ちは誰？」と聞くと、生徒はビル・ゲイツだとみんな知っています。彼と世界で二番目のお金持ちのウォーレン・バフェットが合わせて十数兆円で何をやるかというと、教育と福祉です。一番のお金持ちが、マザー・テレサのようなことをやるわけです。遠慮なくお金をもうけて、遠慮なく使いなさい。七億円あれば、君たちの名前を付けた体育館を和田中学校に造れるよ（笑）とも触れる。もちろん、ボランティアの大切さや人間としてどちらが偉いかということとは全く関係な

いことは押さえておきますが。授業では、この前半の「もうける」をいかに鮮烈に語れるかがポイントになります。

中学校長こそ最後にやるべき仕事

須田 今後、どのようなビジョンの下で、どのような活動を展開していきたいと考えていらっしゃるのですか。

藤原 「和田中モデル」の普及ですね。

一つは、五〇分授業を四五分にしてコマ数を増やして、生徒が理解しやすいようにしたこと。これは、現在の指導要領にのっとって実施することができます。次に、「よのなか科」の連続公開講義により、地域の大人と子供と一緒に学ぶこと。これにより、大人も子供も情報編集力が身につきます。理性の運用技術という意味で、「リテラシー」と呼んでいます。そして、地域の大人を核にした「地域本部」づくりです。これが最強のマネジメント手法といえます。学生や地域の大人が土曜寺子屋や図書館の運営、校庭の緑のお

世話をしてくれるのです。教員一人増やすと人件費や一般管理費などで約一二〇〇万円掛かります。六〇人のボランティアにお願すると、これが約六〇〇万円で済む。どちらが子供たちの学びを豊かにしてくれるでしょうか。

さらに言えば、中学校長の六〇歳定年制を取り払いたい。中学校の校長は子供たちの人生にあって一番重要な影響を与える存在です。ここに本物の大人をあてる必要があります。

日本中の中学で校長は、「人生の最後に巡ってくる最も名誉な仕事」としたいのです。納得感のある人生を歩んだ人が、中学校長として自分のネットワークのすべてを子供たちにつないで去っていく。日本という国で最も名誉ある仕事にしたいですね。須田さんも、審議委員の任期を終えられたら、ぜひいかがですか。土曜寺子屋の校長でもいいですよ。

須田 寺子屋ですか。いいですね（笑）。本日はお忙しい中、金融教育を含めさまざまな示唆に富んだお話を聞かせていただきました。ありがとうございます。